

日本人の宗教心

児玉 寛嗣

徳川幕府は人々の所在をしつかりと把握するために一人一人が菩提寺に属する制度を設けた。身内のものが亡くなると家族は菩提寺の住職に葬式をあげてもらい遺骨を菩提寺にある各自の家の墓に収めていた。人々も信心深く、故人の命日や彼岸、盆にはお寺や先祖の墓に詣でてお参りするのが常であった。実家は寺だったが、先祖は宗教を通じて世の中に貢献してきたのだと思っていた。しかし、「逝きし世の面影」という本を読んで少なからずショックを受けた。

この本は幕末から明治にかけて日本を訪れた西洋人の目に日本の社会がどう映ったかを彼らの残した日記などから紐解いたものである。本の著者は明治以降、西欧化して日本も変貌したと言いたかったようだ。混浴や全裸の女性の庭先での行水には驚いたとのことだが、すぐにこれらの風習は姿を消した。しかし、宗教心は変わっていない。一神教であるキリスト教を信奉する彼らには日本人はいたって宗教心の薄い民族に見えたようだ。次のような記述が見られる。

「日本人はまるで気晴らしをするかのように祭日を大規模に祝うが宗教そのものには無関心である。宗教は精神的欲求を満足させるものとしては作用してない。それに反して迷信は広く普及してお守りなどを身に付けるのが普通になっている」

現在で通用する寸評だ。また、次のような記述もある。

「農民や女性は宗教的だが武士階級は信仰に無関心で僧侶を軽蔑している。来日した西洋人に宿泊施設として寺院が提供される。そこでもっと広いスペースが欲しいという住職は仏間から仏像を撤去してくれる。西洋では教会を宗教の異なる外国人に宿泊施設として提供することはないし、ましてや祭壇の十字架を撤去することなどあり得ない」

イザベラ・バードが日本のある高僧に宗教の現状を尋ねたところ、「日本には迷信は多く存在するが真の信仰はほとんど存在しない」と言われたそうだ。

先祖はこれらのことを実感していたのであろうか。

参考図書 「逝きし世の面影」 (渡辺京二著・平凡社ライブラリー)